

青春の詩



一般社団法人米沢工業会

詩碑建立の記

“青春”の詩は、米国人 Samuel Ullman(1840年～1924年)の原作“Youth”に基く英詩を岡田義夫先生(母校元非常勤講師)が翻訳され、森平三郎先生により世に贈り出されました。

Reader's Digest 1945年12月号に“How to stay young”の題で、詩“Youth”とマッカーサー将軍 (General Douglas MacArthur 1880年-1964年)との関係が紹介されました。これを読まれた岡田先生は、その詩の内容に共感され、格調高い美しい日本語に翻訳し、座右の銘とされました。

当時の米沢工業専門学校校長の森先生は、この翻訳に深く感動され後の1958年桐生市の東毛毎夕新聞に“青春とは”の題で随筆を寄稿された折りに、その中でこの詩を、親友岡田義夫氏の名訳であると紹介されました。

それ以後、この詩は日本全国に、多くの愛誦者を生んでおります。

この詩は、青春の真の意義を訴え、翻訳詩とは思えぬほどに詩の顔を踏み、日本語の語調を見事に生かし、原詩の域をも超えるほど、高く評価されています。

岡田先生は、この詩を公にされませんでしたので、森先生の紹介がなければこの素晴らしい詩は、世に出ることがなかったであります。

私たちは、この詩が、私たちの母校で教鞭をとられた両先生によって、世に公にされたことを誇りとし、母校こそが名訳“青春”の詩誕生のルーツであると自負して、詩碑を建立し両先生の遺徳を偲び、顕彰することを発起いたしました。

ここに両先生に深く敬意を捧げ、この詩が多くの人々に愛誦され、永く永く継承されることを願いたします。

両先生の経歴

森平三郎先生 (1891～1980)

1943年(昭和18年) 米沢高等工業学校校長

1944年(昭和19年) 米沢工業専門学校校長

1952年(昭和27年) 山形大学工学部長

1953年(昭和28年) 山形大学学長

1955年(昭和30年) 退官

岡田義夫先生 (1891～1968)

日本羊毛工業会の碩学と言われた元老

元日本フェルト工業統制組合 専務理事

1952年(昭和27年) 山形大学工学部 繊維工学科 非常勤講師

1957年(昭和32年) 退任

青春

原作 サミエール・ウルマン
邦訳 岡田義夫

青春とは人の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。
優れた創造力逞しき意志、突如情熱、怯懦を奪ける勇猛心、
容易を振り捨てる冒險心、こゝろ言う様相を青春と言うのだ。
年を重ねただけ人は老ない。理想を失ふ時に初めて老いがくる。
歳月は皮膚のしわを増すが情熱を失ふ時に精神はしぼむ。
苦悶や狐疑や不安、恐怖、失望、こゝろ言うものを恰も長年月
の如く全老いさせ精氣ある魂をも芥に帰せしめてしまふ。
年は十七であるとか十六であるとかその胸中に抱き得るものは何か。
曰く驚異への愛慕心、空にきらめく星辰、その輝きにも似たる
事物や思想に対する欽仰事に處する剛毅な挑戦、小児の
如く求めと止まぬ探求心、人生への歡喜と興味。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる。

人は自信と共に若く 恐怖と共に老ゆる。

希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる。

大地より、神より、人より、美と喜悅、勇氣と壯大、そして
偉力の靈感を受ける限り、人の若くは失われない。
これらの靈感が絶え悲歎の白雪が念心の興まても敵い
つくし、皮肉の厚氷がこれを固くどすに置れば、この時にそ
人は全くに老いて、神の憐れを乞ふる他はなくなる。

サムエル・ウルマン年譜

■ 1840年04月13日

ドイツのシュトゥットガルトの南約50キロ、ヘシンゲン(Hechingen)に生まれる。

■ 幼年時 アルザスに移る。

■ 1851年 両親と共にアメリカに移住。ポート・ギブソンに住む。ミシシッピ河の河港でニューオリンズの北北西約230キロくらいのところ。

■ 1860年 リンカーン大統領就任。南北戦争起こる。

■ 1860年 南軍のミシシッピ第16歩兵連隊に入り、リー将軍のもとで戦う。

■ 1862年08月 マナサスの第二会戦で二度目の負傷。

■ 1865年 (南北戦争終わる)ポート・ギブソンの南のナチェに移る。

■ 1867年 エマ・マイヤーと結婚。

■ 1884年 アラバマ州バーミングラムに移る。金物屋(ウルマン・ハードウェア)を開業。市の教育委員とエマヌエル寺院の役員となる。

■ 1886年 エマヌエル寺院の会長となり、1890年までつとめる。

■ 1887年 バーミングラム・ナショナル銀行の取締役となる。

■ 1890年 エマヌエル寺院のレイ・ラビとなり、1894年までつとめる。

■ 1893年 教育委員会の委員長となり、1900年までつとめる。

■ 1895年 市の参事会員となり、1897年までつとめる。

■ 1896年03月04日

妻エマ死す。

■ 1899年 ポーランドのクラコフにおける出版物でウルマンの業績がたたえられる。

■ 1901年 十二番街に設けられた小学校がウルマン・スクールと名づけられる(この学校は約35年後、高等学校となり現在はアラバマ大学の一部である)。

■ 1920年04月

80歳の誕生日に当たり家族がウルマンの詩集『80年の歳月の頂から』を出版。



YOUTH

Youth is not a time of life — it is a state of mind; it is a temper of the will, a quality of the imagination, a vigor of the emotions, a predominance of courage over timidity, of the appetite for adventure over love of ease.

Nobody grows old by merely living a number of years; people grow old only by deserting their ideals. Years wrinkle the skin, but to give up enthusiasm wrinkles the soul. Worry, doubt, self-distrust, fear and despair — these are the long, long years that bow the head and turn the growing spirit back to dust.

Whether seventy or sixteen, there is in every being's heart the love of wonder, the sweet amazement at the stars and the starlike things and thoughts, the undaunted challenge of events, the unfailing childlike appetite for what next, and the joy and the game of life.

You are as young as your faith, as old as your doubt; as young as your self-confidence, as old as your fear, as young as your hope, as old as your despair.

So long as your heart receives messages of beauty, cheer, courage, grandeur and power from the earth, from man and from the Infinite, so long you are young.

When the wires are all down and all the central place of your heart is covered with the snows of pessimism and the ice of cynicism, then you are grown old indeed and may God have mercy on your soul.

この感動を一人でも多くの人に

詩の由来

「青春の会」会長

トッバン・ムーア株式会社社長

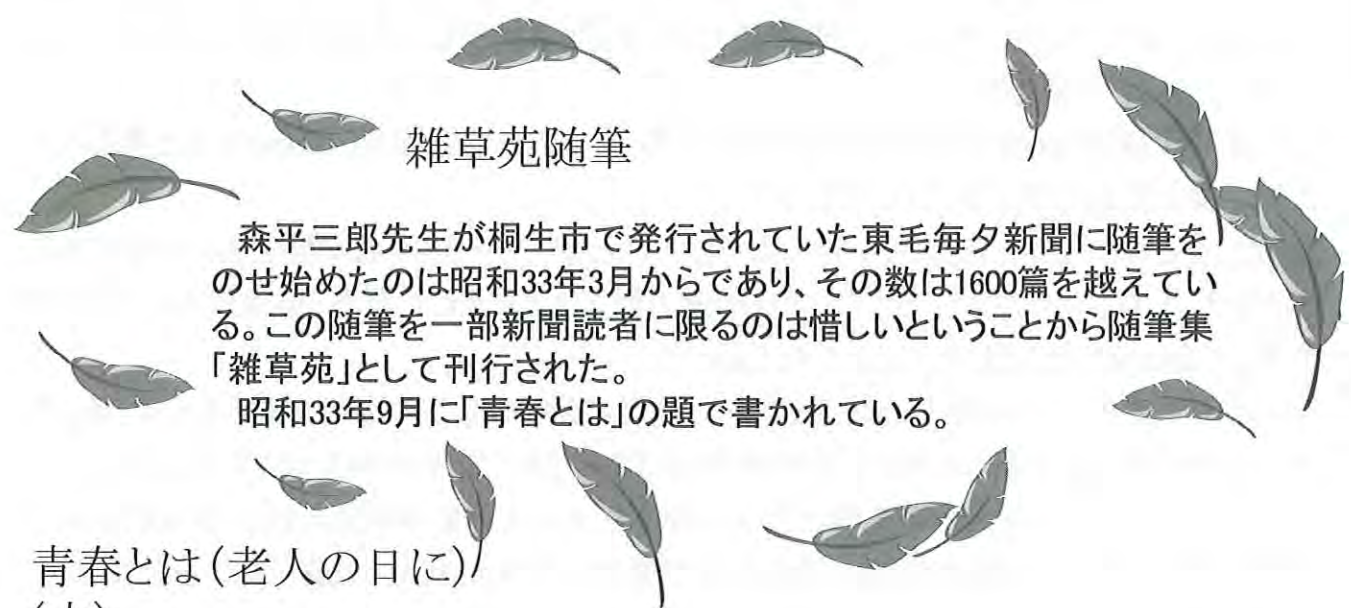
宮澤次郎

原作者はサミュエル・ウルマン(1840-1924)というアメリカ人で、アラバマ州バーミンガム市の実業家です。自費出版した詩集のなかで、この詩YOUTHだけが有名になり、幾人かの手で修正加筆されて現在の詩文になりました。

日本に紹介されたのは終戦の年で、英文誌「リーダーズダイジェスト」(昭和20年12月号)に、「占領軍総司令官のマッカーサー将軍が、座右の銘としていた詩」として掲載されたのが発端です。

この記事を読んだ岡田義夫氏(1891-1968)が感激して翻訳し、自分の仕事場(日本フェルト工業統制組合)の壁に張っておきました。それを友人の森平三郎氏(元山形大学学長)が訪問した時に目にとめて感動し、書き写しました。後に昭和33年、新聞の随筆で詩の全文と岡田氏とのいきさつを書かれたのが、この邦訳が日本で公にされた最初です。

私は昭40年の春に、この詩文に出会いました。その感動を自分の胸だけにしまっておくことができず、以来20余年間、会う人ごとにお話して共感を分かち合い、希望される方には詩文をお贈りしてまいりました。その数は、すでに一万人を超えています。これらの方々がまた周囲に感動の輪を広げておられます。それは、この詩が、万人の心の中に地下水のように流れている“青春”の気を、湧出させる力をもっているからでしょう。



雑草苑随筆

森平三郎先生が桐生市で発行されていた東毛毎夕新聞に随筆をのせ始めたのは昭和33年3月からであり、その数は1600篇を越えている。この随筆を一部新聞読者に限るのは惜しいということから随筆集「雑草苑」として刊行された。

昭和33年9月に「青春とは」の題で書かれている。

青春とは(老人の日に) (上)

蔵前時代の同級生に岡田君が居る。もう数年で70才になる筈であるが、全く元気である。卒業するとすぐ毛織の会社に入社したが以来一貫して毛織物の仕上げを本業として居る。

彼は仲々の通人であって酒は減法に強い。その道にかけても仲々の強の者で、東西の事情に精通しているらしい。と云って道楽に身をくずすなどの事は毫もなく、若い時から勉強もよくやった。蔵前の生徒の頃は、学校がひけると浅草から九段の暁星中学の夜学に通い、フランス語の稽古をしていたし、会社へ入ってからは千住から牛込の物理学校へ通って、化学をみっちり勉強した。

学生の頃はパンタラギューと云うあだ名がつけられた。夏の頃当時流行の、叩くとパンパン音のするカンカン帽をかぶり、歩くとギューギューとなる赤革の靴をはいて居た為である。

タラと云うのは、彼はその頃口中唾液の分泌が多く、時にタラリとたらすと云うのである。頭のテッペンから足の先迄をうたったものである。

その唾液のせいかわ彼は熱いものも平気で、さっきと平げる。

一緒に汁粉やに行くと、こちらが一杯目をフウフウやってる内に彼はサッサッと三杯目位にとりついていった。そう云えば、あの蔵前の通りの一杯二銭位の、あんまり綺麗でもない汁粉やや、時によると少々奮発して柳橋のこれは一杯で五銭か十銭の色町めいた造りのお汁粉やへはよく一緒に通ったものだ。何しろ学校から近いし、柔道やボート、さてはテニス等で無暗に腹をへらして居た当時である。

この岡田君は20才の頃、僕が桐生の会社あたりでまごまごしてるうちに早くもイギリスに渡り向うの学校へも工場にも入って本場ですっかり修業をつんでしまった上に帰り際にはフランスにも滞在したのであるから、本業は云わずもがな横道の方も自然たっしやになったのも無理はない。爾来六十何才の今日迄彼は一日もその技術から離れないで、相変らず丸善あたりに続々と洋書を注文してるのである。

これが学校の教師ででもあれば誠に当り前であるが、彼の現在は会社の重役内至は顧問である。そして昨今は若い業者を集めて研究会等も創立し、業界の発展を企画してるのだから、僕などは及びもつかない。

敗戦直後彼はある統制組合の世話をして居った。訪ねて雑談をしてるうちふと見ると壁に何か書いたものがはりつけてある。

読み出すとなかなかによろしい。たづねると、マックアーサーの座右の銘だよとの答である。誰が試したのかなかなかよろしい。きけば俺の訳だよとすまして居る。僕は感心してその場で写しにかかる。彼はよせよせとてれて居った。

今読んで見ると、その時ほどの感銘はない。当時はなにしろ敗戦で、誰でもがすっかりペチャンコだった。彼の訳にもきつと推稿の余地はあろうが、大体次のような文句であった。

「老人の日」にはふさわしい文句と思う。「青春とは人生のある期間を云うのではなく心の様相を謂うのだ。たくましい意志、優れた想像力、炎ゆる情熱、怯懦を退ける勇猛心、安易を振りすてる冒険心、こういう様相が青春なのだ。年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に始めて老が来る。歳月は皮膚のシワを増すが、情熱をすてる時、精神はしぼむ。苦悶や、孤疑や、不安、恐怖、失望、こういうものこそあたかも長年月の如く、人を老いさせ、生氣ある魂をも芥に帰せしめてしまう。

年は70であろうと16であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。日く驚異への愛慕心、空に閃めく星辰、その輝きにも似たる事物や思想への欽仰、事に対する剛毅な挑戦、小児の如く求めて止まぬ探求心、人生への歓喜と興味。

人はその信念と共に若く、その疑惑と共に老ゆる。人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆる。希望ある限り若く、失望とともに老い朽ちる。大地より、人より、神より美と喜び、勇氣と壮大と偉力との靈感を受け得る限り、人の若さは失われぬ。これ等の靈感が絶え、悲観の白雪が人の心の奥までもおおいつくし、皮肉の厚氷がこれを固くとぎすに至れば、その時にこそ人は全く老いて神の憐れみを乞う他はなくなる。

青春とは(老人の日に) (下)

僕はこの原文も見せて貰った、そうやさしい文句ばかりでもない。これこれこういういきさつだと説明もついて居た。

僕も随分字は下手だが岡田君も上手だとは申せない。その岡田君が大に筆をふるって壁にかけておくのである。僕は改めて感心してしまった。当時は彼も僕も50代であった。

ついでに岡田君の茶目振りも書かないと紙面がふさがりまい。

これは40代の頃である。その頃、彼は名古屋の有名な工場に居った。その名古屋で、我々教師といっても紡織科の主任が数人集つて会合をしたところ、彼は又そのうちに僕以外にも

友人があると云うので一席を設けてくれたが、それでも足りず、やがて岐阜へ案内し、その日の昼飯は、何とも物静かな、樹立の深く茂った山を背負った料亭に誘ったものだ。昔の岐阜城の下にでも当って居たらしい。

この辺迄は無事だったが、その後がまずかった。彼は腹の張った僕や、したたか銘酎してるY教授などをうながして、これから有名な遊郭に案内すると云うのである。そう云う彼を除いては、ともかくみんな夫々の学校の教授である。時は真昼である。まさかと思つてると彼はどうやらそう云う一画の、とあるそれらしい家の前で車をとめさせた。僕はいささか仰天してしまった。

僕と云えども、と勿体をつけなくてもだが、ひと通りの欲望は持つて居る。然し落語や講談は別として、かかる世界は未知である。第一恐ろしくて堪らない。おい冗談はよせよせと色をなして岡田をたしなめるが彼は無理やり他の連中を皆おろしてしまふ。僕は辛うじて座席にしがみつき、ひたすら身の安全をはかつて居たところ、とうとう僕の靴に手をかけてすっぽり脱がして取り上げ、さあ降りろおりろとせきたてる。ここが有名な浅野やだ、大丈夫だから降りろと云うのである。

何が有名なのだか大丈夫なのだかさっぱりわからない。それより僕は早く汽車に乗りたいのだが、人質迄とられては万策つき、手を引っぱられて瓜田にふみ入った。

余人はとも角、僕はおずおずと階段を登ると一同は応接間のような、変にゴタゴタした洋間に通されたが、そうこうしてうちに地元の一人がゲーゲー小間物店を開いてしまふ。何でも床に赤いジウタンが敷いてあったので、さぞかし苦い顔をされた事だろう。こっちはそれどころではない。彼岡田君は心配ない心配ないと云いながらどこかへ行ってしまった。

後で聞くと実は何のことはないのだが、一行は一人一人夫々の部屋に通された。何でも二間が一区画になっており、一応何でも備つている。その部屋の主は意外にも物静かで、顔立ちも仲々である。お茶など入れて応待するが、どうも格別の話もなく、いや早、手持ちぶさたで弱り切った。流石に彼女は気の毒に思ったか各地の名所絵はがきなどをとり出してお愛想をするつもりであるが、相手が僕では誠に間がもてない。やつの事で岡田がどうした、どうしたなど入って来た。どうしたもないものだ。靴ばかりでない、本人が人質では全く弱り入って居るのだ。

岡田君はまだ酔ってるらしく、おいベッドの構造を見たか、こうするんだぜ、と壁のように組み込みになる仕掛けを開こうとするが、それは危い危いと止められてしまった。

どこそこは見たか、ああそうか、じゃあ見学はこれで終りだ帰ろう、帰ろうと彼は誠にあっさりとして居る。いや始めからそのつもりだったらしい。そうとは知らぬこちらだから、いや全く身のちぢむ見学になってしまった。何とか云う名前もあつたらうに、その君の名も聞かず、顔もよく眺められず、ひたすらに閉口した小半刻であつた。彼は、いや彼女はである、世の中には随分野暮天も届るものだと感心した事であろう。

当時はこう云う茶目な岡田であつた。「小児の如く求めてやまぬ探求心」の持ち主である。だから彼は今でも頻る若い。

頼まれればパキスタンにも行く気である。彼の生活はうらやましい。先年夫人に先立たれ、家庭での不自由は誠に気の毒である。

青春の詩碑は母校80周年記念事業の一つとして建立され、平成2年10月1日、80周年記念日の当日、除幕式がとり行われ、山形大学工学部(国)に贈呈されました。

事業主体	社団法人米沢工業会 青春の詩碑建立発起人会
原石	インド産黒御影石
揮毫	米沢市 佐藤信義
施工	株式会社内田洋行
加工協力	金子石材株式会社
レリーフ製作	高岡市 田畑功